

全国病児保育協議会のホームページ <http://www.byoujihoiku.ne.jp>



病児保育協議会ニュース



協議会メール

病児保育は究極の育児支援 ～協議会の組織力を高めよう！～

全国病児保育協議会会長 藤本 保

あけましておめでとうございます。昨年は加盟施設も一段と増えました。今年も多く仲間が増えることと期待しております。協議会としては、第三者評価とリスクマネジメントを目標としたいと考えています。

さて、育児支援ということが叫ばれてもうずいぶん経つ。最近では少子化対策としての意義が強調されているような感があるが、もともと育児が両親の力だけでできるはずがない。子どもが成長発達するためには、子ども社会とそれを包み込む全ての環境が子どもたちのためによりよく機能していなくてはならない。家族が、地域が、そして国家が、子どもを持つ親を支えてこそ育児が成り立ち、子どもは育っていくものである。

良い環境の中で子どもが生き生きと生活する条件整備をすることが求められているのである。

育児支援には、子どもの育ちを見守り、それがうまくいくよう手助けすること、親の育児行動に手助けすることの二つの立場がある。子どもの健やかな成長発達を阻害する最大の要因が病気であり、事故であろう。逆に、健全な発達を保障するのが、幸せな家庭であり、地域社会や学校教育に負うところの養育環境ということになる。

病気の子どもを家庭で孤立化させ、不安で余裕のない親のケアだけに任せて良いのであろうか。親が病気の子どものケアが十分できないから、できるように手助けすることのみが病児保育ではない。

もちろん親の育児活動の中で病気の子どものケアほど困難なものはないであろうから、ここを手助けすることは、非常に大きな意義があることは言うまでもない。しかしもっと重要な意義に、病気の時だって子どもにとって友だちとの交流は必要であり、病気という体験を通して学ぶべきことはたくさんあり、よりよい教育が保障されるべきである。病児保育を受けることは、平常時にはない思いやりを感じ、思いやりの心を発達させる絶好の機会であるに違いない。



研修会はスタートライン

全国病児保育協議会 研修委員会委員長 二宮 剛美

平成14年12月7日、8日に千里ライフサイエンスセンターの第11回全国病児保育協議会研修会は、北海道から鹿児島県までの参加者が過去最高の336人集い盛況でした。

今回の特徴として、会場の変更で参加者収容数や交通アクセスは改善し、託児所開設も好評でした。自由演題の分科会では討論の引き金として会員自ら自由に発題しました。発表手段も口頭、スライド、OHP、パワーポイント、ビデオなど効果的に使われました。病児保育に携わって1、2年以内の人を対象にした基礎セミナーは参加希望者も殺到し、いかに

基礎からの勉強意欲のある方が多いかが判りました。実績ある近畿ブロック以外の地域でも、最近組織化や研修会・交流会も行なわれるようになりました。従って全国大会ともいえるこの研修会も、今までのスタッフ研修会と施設長・主任研修会の1年に2回開催を、平成15年からは統合し、1年に1回7月の祝日海の日を利用した2日間、連休に開催することになりました。

研修会参加者アンケートでも祝日、連休開催だとスタッフ全員が参加できる旨の要望がありました。アンケートでは特別講演を筆頭に予想以上に良い評価をいただ

きましたが、やや消化不良だったという意見もあり、次回は質疑や討論にさらに時間を確保したいと思います。

しかし、消化不良部分も次回へのエネルギーです。ぜひワークショップとして、例えば厨房衛生管理指針を作る、啓蒙や広報のポスターやパンフレットを作る、あるいは関係法令の解釈や注意のリーフレットを作りいわばマニュアルの追補版として次回の研修会抄録集に形のあるものとして残したいものです。まだ参加したことがないあなたもスタートラインとしての研修会に参加しましょう。燃えますよ。

特 **第11回研修会基礎セミナー** **集**
 = 総論・保育士のための看護知識・看護師のための保育知識 =
 むかいだ小児科 向田 隆通



新しい施設も激増し、病児保育の基本的な考え方等、各施設が共有しておきたい考え方、方針等を、特に新たな施設に知ってもらっておく必要が出てきました。

もちろん、当初より参加の施設であっても、職員の入れ替わり等もあるでしょう。そのような必要性から、今回の研修会では、基礎セミナーと題して講演をまとめました。今後定期的に病児保育の基礎的な事柄を系統的に2 - 3年のサイクルで行う予定です。

今回は「総論」、「保育士のための看護知識」、「看護師のための保育知識」と、若干総論的な、大まかなテーマとしました。後で回収したアンケートの結果で、時間の配分、テキスト・レジメの作り方をもう少し配慮したセミナーにしないといけないなと思いましたが、今後、職員のレベルに応じたセミナーに発展できると良いと思います。

また、具体的な点を説明してほしいとの意見が多く、以前からの大きな要望の1点ですので、どのように取り入れていくかも今後の課題のように思いました。以前行いました、救急蘇生法の実際とい

うのも定期的に入れても良いものかもしれません。

病児の食事について、今回は別仕立てとしましたが、これも基礎セミナーというべきものの一つにふさわしい事柄です。2 - 3年で基礎セミナーを終了すると、病児保育についての基礎的なことはマスターできる、その様な基礎セミナーを目指していきたいと思いま

す。



特 **第11回研修会シンポジウム** **集**
 = 病児保育の食事 =
 みやた小児科 宮田 章子



このシンポジウムではそれぞれ違う給食形態でおこなっている3つの施設から現状・特色、

理念などを発表していただきそれぞれをもとにいくつかの問題となるべき点について討論し、フロアからの質問についても議論した。また近畿施設のご協力をいただき施設での食器の工夫の展示、食品の試食会なども同時に行い盛りだくさんで新しい試みとなった。

シンポジストのむかいだ小児科キッズハウスでは、外注方式を採用、食材の合理的な保存の仕方・レトルト食品を上手に使う工夫、少しでも食べてもらうことや楽しい食事のための献立や容器の工夫、食事を提供するための様々な情報のサイトを紹介していただいた。

ひかり病児保育園からは、病室閉鎖をしたため使われなくなった

給食施設を病児保育施設と職員の給食提供に有効に再利用した運営の紹介。衛生管理の実際の報告があり法的な規制についてもコメントをしていただいた。同時に今後、協議会主導の厨房衛生管理ガイドラインの作成が必要との要望も出された。

酒井院病児保育所ラッコからは、施設内での給食提供という形態で、利用者の病状や体質、年齢にあわせ入室日に管理栄養士が献立、買い物、調理をこなし、コスト計算をしながら運営している実を報告していただいた。

フロアから衛生管理面での各関係機関の見解と勧告が病児保育施設の開設に障害となった報告があったり、質問・意見として病児食をどうとらえるかで議論となった。病状にあわせた栄養面や吸収面から考えた病人食に主眼をおくのか、食べられる食事、楽しい食事に主眼をおき栄養面は二の次に考えるのか? など、これからもつ

と討議すべき問題が多くあることが認識された。時間の制限もありまだまだ議論をしつくせない点が多く、シンポジストが医療機関併設型が偏ってしまったなど、ガイドライン作成に結びつけるまでには、さらに食事についての検討を継続して続けていく必要があると思われる。

最後にシンポジウムで紹介された食事関係のお役立ちサイトの一部紹介。

わんぱくランチ

<http://www.admcom.co.jp/wanpaku/>

行政からの通知文書から衛生管理、アレルギー食について、その他様々な情報満載

大量調理施設衛生管理マニュアル

厚生労働省Hp

<http://www.mhlw.go.jp/houdou/0903/h0317-3.html>

特 第 11 回 研 修 会 分 科 会 集

分科会 1
 聖徳短期大学保育科
 座長 野原 八千代



自由演題の最初のセクションは、病児保育室をすすめていく中で生じてきた問題点・課題に

対する取り組みについて、発表、討議が行なわれました。
 こどもケアハウスぞうさんからは、桑名市以外の近隣市町村から

の受け入れが毎年増加している現状と、増加の理由を一つの事例で紹介、また他市町村とは契約をせずに受け入れをしているなど問題点もあげられました。

あすか病児保育室からは、当日の朝のキャンセル率が43%と半数近くに及ぶ現状を分析、それを基にキャンセルの効率化に向けて試みられている改善策について発表がありました。

枚方病児保育室からは、延長保育を市の事業ではなく独自の事業として開始した経緯、実施後の状況、問題点、課題などがだされ検

討されました。
 最後に中野こども病院アリス保育園病児保育室から、病児保育室から入院加療が必要になったケースが報告され、病院型施設の利点とともに、速やかに適切な医療に結びつけるためには、病状の変化を早期に発見すること、病院との連携体制が重要あることが述べられ、これに関連してフロア-から、保育士などスタッフの技術の向上、それに向けての研修システムのさらなる充実が求められました。

分科会 1
 中野こども病院アリス病児保育室
 座長 園府寺 美



一般演題 12題は発表者・演題とも多種多様で、事前にはどう進行していったらよいのか

少々不安だったが、始まってみると、最初の4題から活発なディスカッションで予想外に時間をとった。演題5から8までのうち、前2題は保護者へのアンケート調査結果が主で、それぞれに各施設の

利用状況をうまく組み込んでおられた。季節変動は小児科外来そのものを反映しており、どの施設も運営に頭を悩ます宿命と実感した。

アンケートに表れた保護者の要望は、開閉園時間の延長や日曜祝日の入所、さらには送迎を希望するなど、今の社会のニーズというべきなのか親の意識の変化というべきなのか・・・アンケート調査も一度で終了することなく、変化をみていくことで社会事象までも把握できるのではと感じた。アンケートから具体的に次の目標設定を行い、その目標がいかに達成されたかに繋げていってほしい。

保育士の業務提携については、山口の金子先生が長所・短所を明確に示された。向田先生から問題点を指摘いただいたように病児保育協議会として最低限押さえておかなければならない点を明確にしていくべきである。
 病児のケアに携わる者は常に知識と経験、研鑽を積んでおく必要がある。そのためにこの病児保育協議会が担う役割も今後ますます大きくなっていくと考えられる。今回の1日目のセミナーのように研修の場の提供を継続し、病児保育の質を高めていきたい。

分科会 1
 南クリニック
 座長 南 武嗣



分科会1は自由演題ということで、様々な取り組みが発表されました。

テレビ電話(FOMA)の導入は利用児と母親のコミュニケーションに有用で、利用した保護者にも好評のようでした。

た。導入にもそれほど費用がかからず病児保育室に適したアイテムと思われました。

保育士の病児の状態の観察など、看護面での積極なかかわりについての発表がありました。まさしく保育看護の実践例で勉強になりました。

病児保育室での保育の充実として、日替わりの利用児に対しても月ごとの長期の保育計画の実践、個人日誌の工夫、安静時の保育や異年齢児の保育の工夫などについて発表があり参考になりました。

点滴に関する発表がありましたが、病院で点滴の接合部のはずれから失血死なども報告されており、病児保育になじまない医療行為ではと考えられ今後も検討が必要と思われました。

経験豊かな施設から他の施設でもすぐに応用ができる工夫の発表が多く大変勉強になりました。今後も自由演題の発表の発展を期待します。



分科会 2

エンゼル多摩

座長 池田 奈緒子



第2分科会「病児保育の地域交流」では、各地方の病児保育室同士の交流と、病児保育室

と地元保護者等との交流という、二つの内容についての発題がありました。

病児保育室同士の交流については、まず宮崎県から、大学職員の声掛けで始まった「みやざき病児

保育交流会」の例が紹介され、次に全国病児保育協議会が出来る以前から、地域の病児保育室で集まっている「近畿ブロック病児保育学習交流会」の発題がありました。一方平成12年に市内1ヶ所始まり、翌13年に3ヶ所になった際にすぐに立ち上がった「横浜病後児保育協議会」の発表がありました。

又、地域の方々との交流では、東大阪市から「ふれあいのじかん」を持って地域への浸透、理解を得ている例が報告され、フロアからもたくさんの質問が出されました。

施設数が増えてきているとはい

え、依然として孤軍奮闘の施設が多い中、例え、2・3ヶ所でも連絡を取り、情報を交換し合い、その小さな交流会同士で更に手を繋ぎ、その集まりが又連絡を取り合っ

て等々、徐々にピラミッドのように交流会が発展していく事が大切なのでは、とのコメントがありました。そのためにも、小さな小さな交流会を初めて計画している施設のためのアドバイス、地域ブロック会を開催するためのアドバイス等、今回のような分科会が今後更に活発に利用される事と思われま

分科会 3

よいこ病児保育室

座長 羽根 靖之



分科会3では演題が4題と少なく、開催前は時間が余って困るのではと心配

でしたが、皆様の活発な御意見や助言者のひかり病児保育園深谷憲一先生のサポートのおかげで、時間枠が短く感じられるほどでした。

あおぞら病後児保育室さくらんぼの柴田先生の御発表は、それだけ

で分科会の全時間を費やしても充分な程の多くの示唆に富んだ内容で、大変勉強になりました。貴重な症例を提示して頂いたことあらためて感謝申し上げます。すみれ乳児院の小田先生の御発表では、「ひやり、はっと」への取り組みを、インシデント・アクシデントレポートとして実際に病児保育に活用されていて、各施設で今後取り入れていく際のモデルとして大変参考になりました。よいこ病児保育室の畑先生の御発表は、ケースカンファレンスが異職種間の理解を深めチームワークを高める一手法として有用で、開設間もない施設等での問題解決方法として参考

になりました。四日市市病児保育室カンガールの伴先生の御発表では、ISO9001という国際規格への取り組みが、スタッフの意識改革をもたらすという点でリスクマネージメントに有用な手法と思われ

れました。以上の4題に加えて、深谷先生の損害保険に関するわかり易い解説もあって、参加者の皆様には、午後からの帆足先生の特別講演を聴講していただく上での予備知識として、参考にしていただけたのではと思います。

多数の会員の御参加と御意見を頂戴でき、誠に有り難うございました。

分科会 4

きらら保育園病後児保育室ひかり

座長 森田 倫代



保育所型は、平成12年度から国の補助金受託施設が増えてきている。それ

以前から地域や保護者の要望があり独自に行っている園もあり、その中にはまだ、補助金受託施設になっていないのでその準備を始めているというところもあり、双方からの発表をおこなった。

保育所型でのキーワードは「共

通理解」ということだろうか。医師会、他の保育所、保護者、また、保育園内の職員同士。「医師」との連携では医学的に「病後」というはっきりした定義がない中でそのような子どもを預かるということが医師に抵抗があるようだ。また、協力医院は嘱託医のような報酬はなく、関り方が定まっていはいない。今後、どのような協力体制をとっていけばよいのかが課題だろう。

「他の保育所」では、いつも通っている保育園ではない施設に病後預けるということに抵抗があるようだ。精神的に不安定にならないかが懸念されている。これに関

しては各施設の発表の中で子どもとの面接や遊びなどの中で工夫があり、2:1の職員配置での安定した保育が努力されていた。

「保護者」に関しては、解熱剤で熱を下げたり、下痢がひどくても熱がないので普通保育室で保育を受け、しんどそうにしていたりする事があり、子どものしんどさを保護者に伝えていく難しさを感じている。

また、「保育園の他職員」との連携では、調理員との食事の問題で胃腸食の用意などがある。しかし、経験を重ねていくうちに病後児での配慮が、普通保育の子ども達の配慮につながるまでになったと

の嬉しい発表もあった。同じような問題を抱えている施設が多く、

助言者の帆足暁子先生から「保育所型病後児保育室のネットワー

ク」を作っていきたいとの話があり、今後の活動が期待される。

分科会 5
さくらんぼ病児保育共済会
座長 小谷 恵美子



北は青森、南は鹿児島と全国から参加があり、補助金をめぐって行政とのかわりに一生懸命奮闘しておられるようすは、全国の多くの施設がたどってきた苦勞がいまだに続いていることを表しており、市町村レベルでの働きかけの大事さを考えさせられました。

北は青森、南は鹿児島と全国から参加があり、補助金をめぐって行政とのかわりに一生懸命奮闘しておられるようすは、全国の多くの施設がたどってきた苦勞がいまだに続いていることを表しており、市町村レベルでの働きかけの大事さを考えさせられました。

名古屋市などは病児保育などなくても他の子育て支援で十分であるという姿勢をくずしていない現状があり、大きな赤字をかかえてのなずな病児保育室の苦勞を一日も早く解消するには何が必要か、が話し合われました。

特に課題になったのは、病児保育への理解・認知度が一般的にはまだまだ浸透していないということで、協議会としても全国レベルでのPRに力を入れるとともに、メディアの応援や署名活動をはじめ、特に保育者・保護者に協力者になってもらうなど、地元での地道な世論づくりが必要であるということでした。

助言者の協議会会長藤本氏からは、「病児保育は親の就労を助けるだけでなく、子育てしているすべての親を対象に病気の時に支援のできる専門機関であることを、実践を含めてPRする」と締めくくられました。

また、市町村にまたがる利用への行政の広域支援を勝ち取った例やNPOで病児保育を立ち上げる話も目新しいことでした。他にも市町村合併の動きの中で、病児保育への支援もストップしている実情もききました。頑張っている熱き開拓者に乾杯！！でした。

特 第 11 回 研 修 会 特 別 講 演 集

特別講演
枚方病児保育室
座長 保坂 智子



本吉先生は昭和6年生れ。東京家政学院を昭和26年ご卒業後、一貫して東京都公立保育園

畑を歩んでこられた。若き保母として赴任当時は戦後間もなくのこととて東京都下全域で公立保育所は約70ヶ所、今世田谷区で約5

0ヶ所という時代に入り、先輩園長らと共に公保育の変遷を身をもって見守り、育て上げられたお立場である。

するどい視点と子どもの感性を受けとめる聡明な感受性、情熱的と云える程の子どもの立場への理解がうかがわれるご講演であった。日常の子ども達のさまざまな姿を豊富な例をあげて楽しく語られた。自由に伸び伸びと園庭を走り回り、泥にまみれ乍ら、自己主張だけでなく他者への思いも培われてゆく保育所の子供たちの姿は、病児保育室の中で看護をし乍

ら短期間の保育につとめざるを得ない私たちに新鮮な語りかけとして受け止められた。

先生は園長を定年でご退職後にはそのご経験を「私の生活保育論」等に集大成され(刊行 フレーベル館 2001年 18版)又折々に、聖心女子大学等数校の大学に招請され非常勤講師として保育論の講義をもたれた。最近には講演活動、執筆活動につとめられ数冊のご著者を著し今なお保育者としての活動をつづけて居られる。

特別講演
大分こども病院
座長 藤本 保



病児保育では通常の保育に比べ病児であることから生じるリスクがある。帆足先生はリスク

マネジメントの前提として、保育看護の専門性をまず強調された。その中での職員間のコミュニケー

ションの重要性を説かれ、「情報の共有化」のための種々のポイントを示された。また、全ての児童福祉施設において構築されている苦情解決システムが、リスクマネジメントの観点からも極めて重要であることを「説明と納得」と言うことで説明された。利用者が指摘した問題を解決することが事故を未然に予防することになるということである。

人間はエラーをおかすものであるという前提で「エラーを起こしても事故に結びつかない対策」と

「エラーを減らす対策」を実施するための項目について具体的に説明された。詳細な内容は研修会テキストに記されているので、熟読して理解を深め、早速それぞれの施設にあった機構を作って活動していただきたい。

病児保育の質の向上には、保育看護の専門性を高めることと、安全のための体制作りを強化し、危険を回避し、安心と安全を確立して、信頼を得ることが改めて認識できた素晴らしい講演であった。

平成14年母子保健家族計画全国大会(健やか親子21全国大会)報告

大会テーマ『心の時代の母子保健 ~親と子のはあもにい~』

清心乳児園 平田 ルリ子

11月15日(金)シンポジウム・テーマ「現代っ子の性を考える」

<司会進行>(社)日本家族計画協会クリニック所長北村邦夫、NBC ラジオ佐賀パーソナリティ阿部かおり

<シンポジスト>20代前半の若者男女5名のシンポジスト(アメリカの留学生女性・韓国の留学生男性・東京在住女性・佐賀在住男女2名)

<シンポジウム>

(論点・質問)

1)あなたが受けてきた性教育についてお話いただけますか

2)日本の若者達の性の現状についてどう考えていますか

3)日本の性教育の問題点と今後の課題

4)親や指導者は、若者達にどうアプローチしていったらよいでしょうか

1)について

・アメリカ...宗教的には、セックスは、結婚後にという形。学校は、禁欲教育から具体的な避妊教育へ進んできている。

・韓国...女性のみの初経教育。
・日本...体の構造や受精など、知識的なもの多い。役に立つ教育なく、記憶にない。

2)3)について

・アメリカの現状...宗教(キリスト教)を背景に、養子や自分の自宅で養育する方法をとり、最後の選択肢が人口妊娠中絶である。日本では、人口妊娠中絶が、避妊

と同列に位置付けられている。妊娠後の選択肢が狭い。

・韓国の現状...日本の状況と同じ。性の商品化が進んでいる。教育の問題が大きいと感じる。女性のための初経教育Pが中心で、誤った情報が氾濫している。

・日本の若者...現状はもっと進んでいるのかもしれない。地域差があるのかもしれないが、データの的には、格差はない現状。

・日本の若者...教育の力が大きいと感じる。役に立つ性教育となっていない。不足しているものとして、避妊方法など名前だけで、使用法は教えない。避妊具もコンドームのみで、教える側も知らないのではないか。隠されれば、知りたくなるし、先走りしてしまう。知識、情報不足は、興味本位を生む。

・アメリカでは、小中高と段階的で、一貫性のあるプログラムが組まれている。高校では、一ヶ月ぐらいかけて、体の構造的な問題から、心理的問題まで扱われる。特に、望まない妊娠など、困った人たちのストーリービデオが多かったため、そうならないための方法を考えた。

・日本の場合、幸福な結婚・妊娠ストーリーが多く。建前、上滑りの教育が多く。本質的問題や現状、現実をきちんと伝えていない。出産=幸せで、暗部を見せない教育。

4)について

・日本の場合は、エイズ教育等の中で、「コンドームの使用を」と言われながら、持っている大人

から不信の目で見られ、学校では、問題児とされる。何か、悪いことをしているような感覚。子ども側は、見つからないよう、怒られないようにとする。

・アメリカでは、健康教育と合わせた避妊やエイズ教育が進んでいる。相談機関が、学校内外にあり、その情報は学校や親から知らされる。恋愛や性について親子の話題となる。

・日本の場合、恋愛や性について親子の会話として成立しない。しかし、10代の若者にとっては、避妊費用や人口妊娠中絶の費用など、かなりの部分で親に依存せざるをえない現実がある。しかし、親子の会話が成立しない。親を巻き込んだ話はできないものだろうか。また、気軽に相談できる機関も必要。

・親の責任として、高校生にもなれば、コンドームを子どもに渡し、自分の行動に責任を持つことの大切さを教育すること。そして、それを親の最後の責任、義務とすべき時なのかもしれない。

<北村氏のまとめ>

・正しい知識、情報と判断力がない状況での性行動は、危険が多い。早い時期に、きちんとした情報を提供したほうが、行動を慎重にし、危険な性行動を遅らせる。

・CAP教育のNO/GO/TELL教育の大切さ。嫌なことを嫌と言える子を育てる。

・性教育は、時期、タイミングが大切である。そして、親の責任として大切な問題である。

全国病児保育協議会事務局

〒870-0943 住所：大分県大分市大字片島83-7 大分こども病院気付

担当：伊東 美紀 電話：097-567-0050(代表) F A X：097-568-2970